

細谷 英二

どんな時代でも、組織人には発信と受信の能力が求められる。その能力とはまず言葉であり、文章である。インターネットの時代においても、文章で自分の意見を表現する方法の比重が軽くなるはずはない。肉声を感じさせるような表現によって自分の考えを伝えるメッセージ力が大切である。企業社会においてステークホルダーといわれ

一つの言語で思考の訓練を十分受けていないと、同時通訳者として活躍できないという話を聞いたことがある。母国語の持つ文化的な力を基軸に思考力を高めていけるかが重要なのだ。

日本語の「読み」・「書き」が静かなブームとなり、知的文化としての言葉が見直されている。知力の源泉は、まともな読み書きからしか完成しない。現在、インターネット時代に入り、英語の能力や情報ツールの使い方が重視されているが、すべての知的活動において基本になるのは母国語の能力である。数カ国語が話せる人でも、

知的文化としての『日本語』を大切に

副代表幹事
経済情勢・政策委員会 委員長
りそなホールディングス
取締役兼代表執行役会長



るお客さま、従業員、お取引先など、利害関係者とのコミュニケーションも言葉が基本である。言葉を大切にすることを組織である限り、その組織は世間に通ずる。

最近、若い世代の「活字離れ」の傾向が強くなり、読書の習慣すら忘れられていることが心配である。新入社員に最近読んだ小説を聞いたところ、ほとんど答えが返ってこなかった。国語の教科書の内容をやさしく、文化としての日本語を軽視している教育も気懸りの一つである。夏目漱石や森鴎外の作品は中学校の教科書から消えたようだ。マンガやテレビだけでは思考の手助けにはならない。書物で真剣に何かを学ぶ意欲が日本全体に不足している。

社内外で講演する機会が増えるに従い、人の心を強く動かすメッセージを創り出すことの難しさを思い知らされる。本を読み、文書を書く努力をすべきたと痛感する。先般、ある新聞社の論説委員と会食した際、「文書を書くのは充電、スピーチは放電」というキーワードで意見が一致した。美しい響きを持ち、豊かな四季を表わす日本語の「読み」・「書き」が「人づくり」の面において再認識されることを期待したい。

Contents

001 ● 巻頭言 細谷英二	知的文化としての『日本語』を大切に
002 ● 特集	同友会起業フォーラム2007 シンポジウムレポート
009 ● 委員長インタビュー	会員セミナー 斎藤博明／山岡建夫 地球環境・エネルギー委員会 数土文夫
011 ● 経済同友会最前線	地球環境・エネルギー委員会提言 ほか
017 ● リレートーク 北山禎介	今こそ国民的合意形成を
018 ● コペンハーゲン通信	メディコンバレー
019 ● 同友会スケッチ	2008年1月の記録と3月の予定
021 ● 新入会員紹介	2008年1月18日現在の入退会者
022 ● 私の思い出写真館 白井克彦	早稲田大学創立125周年式典